

# 鉍石から銀を取り出した鉄鍋の発見

石見銀山遺跡（大田市）、調査年：1997（平成9）年

目次 謙一

世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」は、鉍山跡と鉍山町、銀鉍石・銀の積み出し港と港町、それらをつなぐ街道と周囲の山城から構成されています。その中心部には、銀鉍石を産出した標高 500 メートルあまりの仙ノ山があります。頂上近くに位置する石銀藤田地区の発掘で、私は地表下すぐ、17 世紀の建物跡・道跡を調査し、一緒に担当した先輩職員は、建物跡内を地表から約 2 メートル掘り下げた狭いトレンチ内で 16 世紀の遺構を調査しました。

幅 1 メートルと狭いこのトレンチは、建物跡の背後に開口していた坑道跡の正面に設けられており、下層でも上層と同じく建物跡が確認されました。その片隅で、銀鉍石から銀を取り出す工程に使われた、直径 20 センチあまりの鉄鍋が出土したのです。先輩に呼ばれた私がトレンチをのぞき込んで見た鉄鍋は、

土が付着してその形もわかりづらいものでした。しかし、鍋周囲の木枠が残り、作業用の火箸と鍋の向きがそろった状態は、鉄鍋が使用時そのままに発見されたことを物語っています。狭いトレンチ内ですから、掘り当てたのはなかば奇跡的とさえいえるでしょう。

石銀藤田地区では、鉍山跡・鉍山町が最も栄えたとされる 16 世紀後半から 17 世



藤田地区坑口前トレンチ

紀にかけての建物跡が複数確認されました。一つの建物跡内で、銀鉱石を砕いて選り分けたり、それを加熱して銀を取り出す作業が行われたことがわかっています。鉄鍋は、銀と鉛の合金を加熱して酸化鉛と銀に分離させる「灰吹き法」に用いられました。骨の成分が検出された鍋内部の土は、酸化鉛を染み込ませるための骨灰（こっばい）と考えられるからです。火箸は、鍋内部での作業を操作するためのものでしょう。

それまで石見銀山遺跡では文献史料から推測するしかなかった銀を得る作業について、実際使用されていた鉄鍋・火箸などの道具が出土したことは、研究を大きく進展させました。鉱石から銀を取り出す作業の物証として、出土した鉄鍋は広く注目されたのです。

石見銀山遺跡の発掘調査は現在も継続して実施され、広大な鉱山跡・鉱山町のような銀生産の技術が明らかにされています。仙ノ山の中腹、釜屋間歩（かまやまぶ）地点で出土した銀と鉛の合金も、「灰吹き法」の物証として貴重な遺物です。鉄製鍋の発見は、それら発掘調査による多くの成果の先駆けとなるものでした。

（島根県古代文化センター専門研究員）



坑口前トレンチから出土した鉄鍋

「石見銀山遺跡発掘調査報告 1」より転載